

ら、我れしらす心が激してつひ泣かすにはゐられなくなるのであらう。この場合にはこれが一番本當の心持である。だから、人も感じやすい。思慮分別を通り越してたゞちに生命の響きとして本心をハタと打つ、泣かすにはゐられないのである。きいてゐる人はみなやはり泣く。この話をきいた田中耕と酒井定雄の兩君は、その夜、この話をきかなかつた村山精孝君の家にあつまつて翌曉の三時まで、この事を話たそうである。

私が、槍の縦走を終つて、松本へかへると、この人々は、私を擁して、綜合生活の話をきゝたいといふ。綜合生活を政治の出發點とすることを知れば、私の政治運動はよく分る。私は、ならぬ川の畔にある料亭に、赤魚の味を賞しながら、ならぬ川の水について、綜合生活を話た。折から、雷がなつて、篠をつくような雨は、ならぬ川の水をうつ、雨も、向に見へる山も、雷鳴も、すべて綜合生活の話の料ならぬはない。人々はよく分つてくれたことゝおもふ。

坂西大尉は銃劍術の名人であるそうだ。彼れは、坂西流ともいふべき一流を工夫して、あつばれ名譽の人であるといふ。私は、その銃劍術を、生活の上に應用せよといふ。なるほど、しかし、それは容易の事ではありませんといふ。容易なことでないともいへる。しかしきた、實に容易なことだともいへる。物は考へようだ。物が違ふから通用しないといふ頭がさきになるために、この融通がきかないのである。

ある人はいふ、綜合生活は無限の生活であると、無限の綜合生活は、語ることもまた無限である。

## 八十六

東京にかへつたのは七月の十八日で、すぐ三保の講習會がはじまる。滿洲からは、中川作太郎、角田勝三郎、黒木重安等が、大に立憲養正の氣勢をあげる爲めにわざ／＼やつてくる。神戸の中尾、弘前の佐藤、大阪の村上、信州からは新に加はつた村山、田中、酒井の三人いづれも一騎當千の士が續々あつまつてくる。

私は、三日目の講壇に「吾が生活」を話た。綜合生活と政治との結合についてであ



る。私の話はこの外にない。そうして決着するところはやはり「政權掌握期成運動」の二十年計畫である。

私は、私の二十年計畫について、立憲養正會政綱發表の時から、筆に口に、この事を力説してゐる。けれども、これについて、我が先輩からも知友からも、一言半句の批評をきかないことを頗る物足りなくおもつてゐる。私共が指導する人々の中には、きいて感激して、なるほどそれでなければならぬとおもふ人も澤山ある。たゞ私の同僚であり、儕輩であり、先進である人々の間に、これが話題とならないといふことはさびしい事である。

私の二十年計畫は空想であらうか。私共は、二十年間、死物狂ひになつて力をつくしても政權をとることができない程微力なものなのであらうか。もし二十年で政權がとれないとすると、幾年かゝつたらとれるのであらうか。永久に政權はとれないのであらうか。そうすれば我々は、何を目あてに活動をつゞけ、奮闘を繼續してゐるのであらうか。かうやつてゐれば、いつか世は覺醒する。といふ果敢ない望みに一縷の命を

つないで、大勢といふ濁流の中に孤軍奮闘することが、我等の生命といふものであらうか。私はそう考へないのである。

今の政府は、昔の將軍の幕府ではないのである。今の政黨は、昔の大々名ではないのである。そうして我等は、將軍と大名とに對する百姓町人ではないのである。手段と方法がよく、それを遂行しうる信念と力とさへあれば、私共は政府をつくることができるのである。誰れでも政黨をつくることができる。すでにできてゐる。政黨は大きくすることができ。大きくすれば、政府をつくることができる。

政府は、政友會と憲政會とが分け取りすると定められたものではない。それ以外のものは手を束ねて見てゐるべきものと、定められたものではない。加藤高明は、腹の中から總理大臣であつたのではない。

私の二十年計畫が、若し空想であるならば、私は、その空想であることを指摘してもらひたい。私は、面白半分にこんなことをいつてゐるのではない。やすつぽい命にもしろ、これには命がかけてある。もしそれが空想であるならば、空想の爲めに命を



捨てるのは惜しい。ねがはくば有効につかひたい。

なせ人々は、この政權掌握といふことに全力をそゝいでくれないのであらう。政治をとるのはみんな偉い人たちで、自分たちのような安月給取りは、などゝ卑下することとは無用なことである。安月給取りが一人では困るが十人となり、百人となり、千人となり、萬人となれば、安月給取りばかりでも天下はとれるのである。下らない卑下は、事業の爲めに必らずよしてもらひたい。

現代の政治を否定しながら、知らず／＼その政治の術中に陥つてはいけない。現在の政治の規矩など、かへようと思へばすぐかへられるのだ。かへるつもりでの運動をはじめさへすれば、それはいくらでも人を教へることができるのである。私共は、新しい國家を創造するのである。新らしい世界を創造するのである、こんな腐れ切つた政治に、形式は仕方がないとしても、精神まで支配されるようではどうする。かりに私が日蓮聖人に啓發されないとしても、私の有する世界は、今の政治の世界などよりはすつと豊かなものである。すでに豊かな實質がある。それを大きくさへすればいいのである。

まして、「日蓮が弟子旦那」として、「日蓮が一門」として、願業の生活に入り、「日蓮が如く」振舞はんとする我等が、今の自分たちの事情などから考へて、政權は遠い問題などともしおもふならば、それは罰あたりである。

三保にゐる間、同志は一二度船を海にうかべて、清見瀉の自然に對して大に感懐をのべた。大西長次郎、小平三四郎、小野幸三、前田舜岳などあらたに加はつて、それらの人々の真情の流露は、まことにこの美しい自然とのいゝ調和である。

### 八十七

講習會が終つて、原田の師子王文庫の落慶式に臨む前夜、同志は、駿河大宮の淺間社内にある料亭梅月に集合して一大懇親宴を張つた。この社内から湧き出て、流れるみたらし川の水は、人間の世における清さといふことを代表するに足りる水である。みんなは、この水をあびて身心の垢を洗ひ落した。清い誓ひ。ゆたかな誓ひ、無窮の誓ひ、みんなの心はこの水にむすばれた。あくる朝、みんなはまたこの水をあびた、



不幸にしてこの水は、心ない人間によつて、その水底に無数の汚物を藏してゐる。齋藤美子が殊勝にもそれをひろつてゐるのをみて、私は、全員總動員を命じて、この、セトモノのかけら、空き罐、サル又、ふる草履、わらじ、アキ瓶、入レ齒、などをひろはせた。それが、大きなザルやバケツに三四杯もあつた。田中耕君の肝いりでこゝに制札をたて、かういふ不徳をふせぐことにした。制札の文案は、

清き水にはちよ、櫻を愛するの前、まづみたらしの水底に沈めるセトモノの破片をひろへ云々、(あとは忘れてしまつた)

一同うちつれだつて師子王文庫の落慶式に參じ、暴風雨の中に行はれた、あの、沈痛にして悲愴な式典に列つて名狀しがたい心持の中に、私は立憲養正會を代表して、祝詞一章をさゝげた。私共は、今さらあの風雨に狼狽して、國難の危機こゝにせまれりとおもふ程迂濶ではない。たゞグンと胸にこたへたのは、「お前たち一たい何をしてるか」といふ大きな暗示である。

立憲養正會はできたが、名ばかりじやないか、すこしも活動の實績はあがらないで

はないか、何をグズグズしてゐるのだ。國家の現状が、この暴風雨のようであることは、お前もとづくに知つてゐるだらう。知つてゐながら、ボンヤリしてゐるのはどういふわけだ。

と、せめられてゐるような氣がした。

別にグズグズしてゐるわけではないが、人間の世界にゐる限り、事情といふことの煩累から、そう自由に脱却することはできない。尤も事情はきりひらいてゆくから、それにまけてはしまはないが、時間はかゝるのである。大正十三年から向ふ二十年といふ計畫をたてながら、私は、十三十四の二年をほとんど空過した。尤も、私一人の身のこととは著々とはこんである。だからその方はソツがないとしても、全體が動きたせない状態にある。このまゝでいつたら、折角の二十年計畫も土崩瓦解するだらう。この計畫が瓦解して、人は、百年も二百年もの先きを空想しながら、あてもない人類救済の運動に奔走するとしたら、まことにそれは人生の悲劇である。何とか方法をつけなければなるまい。



東京へかへつた私は、早速「らんせん叢書」の執筆にかゝつた。多年の懸案を解決する。私は、「らんせん叢書」が、約束通りにできなかつたことを非常に耻ぢてゐる。その間の事情について、私は辯解はしない。たとひ事情があらうとも、違約は違約にちがひない。深く慚愧して、會員諸君にお詫びを申上げる。別して、この叢書の遅延について、深く御憂慮をたまはつた恩師先生に對して、慚謝の意を表し奉り、この書の出現によつて御安心をお願い申上げる。

指折り數へれば、大正十年に刊行をおもひたつてから十四年の今まで足掛け五年、その長い間を、一度も督促がましいことをいはれず、全期の拂込を完了してゐながらも、あつく私に信頼して、少しも不平の聲をよせられなかつた會員諸君の芳情は、私の何物にもかへがたい喜びの一つである。それだけに私の慚愧も羞耻も一層である。たゞ、爲めにする二三の悪宣傳を間接にきいたが、それとて私が悪いのだからどうも

仕方がない。しかし、私の事業において約束は生命である。漸くその約束の一つを果すことができるようになったのを私は喜ぶ。

「らんせん叢書」の執筆を叙するにいたつたのを期として、私はこの自叙傳の筆を終らうとおもふ。自叙傳といつても、これはほんの筋書きである。筋書に幾分の潤飾をしたにすぎないこの叙述において、この書をよむ人が、どれだけの益をうけるか、それとも受けないか、それは分らぬ。たゞこの五年間に、私の政治運動が、いかに具體化されたか、そうしてその政治といふものが、どういふ風な性質のものであるかが分ればいゝのである。

書きもらしたが、神崎武雄と奈良晋藏とは講習會の後ち、八月二十日、中川作太郎につれられて、ハルビン留學の途にのぼつた。滿洲内地の同志を歴訪して、ハルビンについたのが九月の四日、今は二人とも、別々にロシア人の家に寄宿して、ロシアの研究に没頭してゐる。偶然にも、「鞍山樂團」の一人である刈谷稻吉が、公主嶺からハルビンに移住して、期せずして彼等は私の尤も留意するハルビンにあつまつた。刈谷



は支那語がうまい。彼れは支那を主としロシアを従として私の研究調査をたすけ、神崎と奈良は、ロシアを主とし、支那を従として、三人一致の行動をとることになった。「我等の根據地としてのハルビン」私は彼等をハルビンに在らしむることによつて、私の身と心とがハルビンにまで擴大し、はるかに赤露に對して屹然として立つ喜ばしさを感ずる。

我等の事業はレーニンよりも大きく、

我等の事業はムツソリーニよりも鋭く、

日本の興廢は我等の手にあり、

我等は天地にむかつて叫ぶ、

「我等の政權掌握」。

(大正十四年十一月四日、午後零時四十二分獨筆)

## 校正を了りて

昨夜、客と話してゐると、二發の號砲が鳴つた。時計をみると八時三十分。あゝおめでたい事だ、私は障子をあけて、しばらく暗い窓外をながめてゐた。皇孫の御誕生、ほんとにおめでたい事だ。神秘的な闇の中に、喜びが躍りくるつてゐる。

客がかへつてから、私はまた校正のペンをとつた。この一括の校正をさへ片付けてしまへば、本文四百四頁の初校は全部すむわけだ。十二時すぎまで努力して三百六十九頁までをすましたが、あとはとう／＼出来なかつた。寝ようとおもひ、寝るまへに夜色をみようとおもつて、窓をあけると、二十一日の月が、さんらんと中空にかゝつてゐる。月も、下弦に近くなると、月といふよりも、なんだか大きな寶玉をちりばめたともいふような感じである。地上には陰影がおほい。かげでないところも、月の光は、いかにもほのかである。静かな夜だ。我が知つてゐる限りの人は、みんなもう寝てゐるだらう、それともまだだれか起きてゐる人があるだらうか、

だれもかも、みんな寝てしまつてゐると思つて、月を見ると、月と私とが、一層したしいような感じがする。月と私だけ、こんな時に月がよけい奇麗に感じられる。此處は木がおほい。木がおほいと、月はいろ／＼な面白い影を地上にみせる。月の奥深さが、地上の物件で證明される。

夜氣は身にしむが、この窓をしめともない。月みるもなれをおもふも、我れにはおなじ心地する」と、小供の



時に、なにかの翻譯小説の中にあつた詩の一句を、どういふわけだか覺えこんで、妻の死後、月をみると、この句がなんといふことなしに口にかんだものだが、今も、いつのまにかそれを小聲でうたつてゐる。

小供等はよくねむつてゐるだらう、彼等は、今宵あたり、亡き母の夢でもみてゐはしまいか。彼等の母の七回忌も、もう四十餘日の後だ、はやいものだ。この滿六年間、大して何もできなかった、といへば、大して何もできなかったような氣がする、かなり出来た、とおもへば、かなり出来たような氣もする。

できてもできなくつても、とにかく今の私としては、「らんせん叢書」の第四が出るといふこと位うれしいことはない。「らんせん叢書」の刊行ができないことの爲めに、私は、どんなに切ない思ひをしたらう。その切なさにもいろ／＼あつたが、父上に御心配をおかけ申したといふことが、私の切なさの十中の八であつた。どうかして一日も早くこの刊行を繼續し、父上のお喜びになるお顔がみたいと、そればかりを念じて、ことしの八月頃から續刊の決意をなし、九月八日から筆をとりはじめて、十一月の四日に筆をおき、ともかくこゝまで漕ぎつけた。十一月の六日に印刷所にはした原稿の校正が、七日たつても十日たつても出ず、仕事のはかどらないのに氣なくさらせたが、二十四日の午後五時、漸く三十二頁の初校を手にしてホツとした。それからの私は、日をもつて夜につき、漸く十二月の七日の朝、初校全部を見了つて、これでまづ大體の見當がついた。間違ひなく本は出いくらかかる。私の肩はこれで漸く軽くなつた。ほんとに安心した。

「らんせん叢書」は、まだあとに六冊を残してゐる。なか／＼大變だ。しかし私は、できるだけ速くかたづけしてしまひたい。もういつといふことはいはない、ただ、出来るだけはやくといつて置く。だが、發刊當時に約束した書とは内容の違ふことをゆるして頂きたい。境遇もかはれば、興味もうつつた。そこにいくらかの變化の生ずるのは仕方のないことであらう。

此書の次に、ほゞ下のようなものを出す豫定である。「女性に對する捧物」(目下執筆中)「山」教育の改造「滿洲」「舊道徳新説」「日本の庭園」。しかし多少の變更があるかも知れない、順序も、必しもこの通りではないかも知れない。

ある人は私に、今までに發表したものをあつめて、叢書の中に入れてもらひたいといふ。しかし、「叢書第一輯」だけは、私は全部、新しく書いたものでほしい。これは私の意地である。そうして私は「叢書第二輯」において、「店頭録」「ラ、ファヴォリタ」「紫烟録」「新茶の頃」「鏗爾録」「社會日評」「毒箭集」「社會日評」「日蓮聖人の聲」「夢殿」「大和の藝術紀行」「京都」「京都の自然と藝術」「我がむさしの」「東伊豆の印象」などを順次刊行したいとおもつてゐる。

「らんせん叢書第一輯」の會員諸君は、やはり、第二輯をも繼續して購讀せられん事を、熱心希望する。

私はこの叢書において、日蓮主義の、尤も這入りい、一の世界を示す計畫である。樂に、自由に、安定のできる世界。叢書の會員諸君は、どうぞこの擴張について盡力して下さい。

大正十四年十二月七日正午、(著者)



附記。けふ朝鮮から手紙が来た。それによると、伊東石子未亡人の病症は、一たん輕快におもむいたが、また

不良の状態になつて、當分退院はむづかしからうといふことである。

この書の執筆中、私は、石子未亡人重態の報を受取つた。この人は私に重恩の人である。私はすぐ朝鮮へゆくことにした。家人に、旅行の支度をさせながら、重れて、容態を問合はせの電報をうつたら、意外にも、經過良好といふ返電に接して、當時、執筆に多忙をきはめてゐた私は、朝鮮行きを見合はせた。そうして、心配しながら日々筆をすゝめてゐると、幸に全次輕快といふことで、近々退院もできようといふ通知に接して喜んだが、此書の本文を校了する今日になつて、また經過不良のしらせを受けた。悲しいことである。

私の少年時代から取去ることのできない伊東石子氏、私の今日には、この人のあたくさい心が多分にはいつてゐる。今、私の生活を叙するについて、この人の病患を憂慮しつゝ筆をとつたといふことも、深厚の因縁であらう。

私は、自分の精神をこめた此書の中に、この人の病惱平愈をいのる文字をとめたい。

(大正十四年十二月十日此書の校了の日)

### ほたるざわ・らんせんノ著書

(書名)	(発行年月)
「日蓮聖人の法華經色讀史」	大正八年四月
菊版 六百五十四頁	
「日蓮聖人と鎌倉時代」	大正八年十月
四六判 二百九十七頁	
「人の安住點」	大正九年四月
四六判	
「日蓮聖人の一生」	大正十年二月
四六判 五十六頁	
「世界大戰の文化的價值」	大正十年十月
(らんせん叢書、一)四六判二百五十七頁	
「一日蓮主義者の生活様式」	大正十年十月
(らんせん叢書、二)四六判三百二十三頁	
「河」	大正十一年三月
畔」(らんせん叢書、三)四六判二百一頁	
「日蓮聖人の足跡」	大正十二年三月
四六判 三百七十五頁	
「神武天皇に還れ」	大正十四年六月
「民意と政治」	大正十四年九月
右二冊 菊半截 小冊子	
「吾が生活」	大正十四年十二月
(らんせん叢書、四)四六判四百四頁	



大正十四年十二月十八日印刷  
大正十四年十二月二十日發行

著作兼發行

田中澤二

印刷者 東京市下谷區入谷町三九六  
金山佐次

印刷所 東京市下谷區入谷町三九六  
博眞堂印刷所

東京市外代々幡町一二一五

發行  
らんせん莊

振替口座、東京七三五三八



536  
172



終